

去年今年（こぞことし）

去

年の今頃は、というのが再三話に出てくる。職場で、家で、あちこちで。同じことではないのだが、それぞれに苦しかったというので共通している。職場ではあるトラブルに見舞われていた。家では家族の健康に赤信号が点りかけていた。どれもほく一人で抱えていたわけではなく、重圧を共有していたからこそどうにかしのげたのだった。

渦中にあるとき、怒りに駆られて買った自転車は、乗り始めてちょうど一年を迎えた。平時なら決して手を出すことのない価格帯を思い切ったのは、憤怒のエネルギーによるのだが、結果その後の一年、風に吹かれて通勤する喜びにじんわり包まれたので、一時の感情に流されるのもまんざら悪いことばかりじゃない、と今は思える。

去年と今年を比較してしまうのは、去年が異常だったから、と思っていた。去年に比べたら今年は何ほどのこともない、と思うのは、困難に対処するときには有効だ。今がゼロで去年はマイナスだったのだ、と。話していると、同僚にせよ家族にせよ、そんなふうに話して流れていく。

だが、去年がゼロで今年がプラスとも考えられるのだ。今の方が異常なんじゃないか、と。事実、異常には違いない。四十年近い教員暮らしで、こんな年は今

までになかった。ことごとく行事は中止、縮小。会場もわかり。これまで要したエネルギーに見事に反比例して、大変だったものほど軽くなり、日常レベルのものがそのまま維持されたのだ。これが有形無形の影響を与えぬはずがない。

毎日届く、児童の欠席状況がそもそも異常である。インフルエンザが皆無、その他の欠席者も嘘のように少ない。新型コロナウイルスを警戒した結果には違いないが、どうもそればかりではないような気がしてしかなかった。そればかりか、児童間、対教師のトラブル、いじめや不登校、などの状況も、これまでと大きく異なる。極めて少ないのだ。ついでに、保護者や職員間のそれを含めることもできる。

新型コロナウイルスといういわば巨大なストレスを全世界が共有することで、個別のストレス、子どもで言えば運動会で競走するとか、音楽会で聴衆を前にして演奏するとか、教員で言えば、研究会に参加するだの、形だけの会合も出ておかなくてはと思うことだの、が駆逐されてしまったのである。その結果としての体調良好、問題軽減だとすれば、新型コロナウイルスがあぶり出したのは、ぼくたちが闇雲に維持し、変異を拒んできたストレス群だったのではないか。

さて、来年の今頃、今をどう振り返るのだろうか。

夕焼け通信1297号 2021.3.1

〒690-0823 島根県松江市西川津町4276-B402
miyaken@me.com gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/
編集 宮森健次



専業ババ奮闘記（その2）43

木幡智恵美

里帰り（4）

義母百歳の誕生日、いつもの年通り、赤貝ご飯を炊き、四世代となった我が家でささやかに祝った。ゴールデンウィークに長男が帰った際、すでに皆で祝いをしている。その前のゴールデンウィークに長男が帰った時は、白寿の祝いで、宍道湖のほとりの料亭で宴を設けた。年を取ると、毎年のようにお祝いだ。翌朝、義母は誕生日祝いにあげたジャンパースカートと上着を着てデイサービスに出かけた。それから、寛大と実歩を保育所に送り、その足で畑へ。収穫だけして帰り、宗矢を風呂に入れ、昼食を摂ってから娘に付き添い、産院に向かう。前日の健診で、体重は標準の増加率を大きく超えるほど増えていたので安心していったところ、スクリーニングで一つ引つ掛かり、再検査になったのだ。

娘が泣くので、「あんたは一か月健診で股関節脱臼だと言われたよ」と言っていた。それに続けて、長男は生後一か月から咳や喘鳴が出るようになって度々病院へ連れて行き、満一歳の時には鼠経ヘルニアの手術したこと、二男は一か月健診で心雑音があると言われ、子ども一人ひとりに心配事があったことを話す。「みんないろいろあつたけど、あんたが一番大変だったかな」と、思い出話が掘り下げられていく。一歳半の時に熱性けいれんを起こし、脱水症状で入院、五歳の時にはヘルペスによる高熱で二週間入院、その後再び熱性けいれんがあり、以来定期的に脳波検査をし、数年間薬を服用したこと、併せて、卵と大豆の食物アレルギーがあり、保育所の給食の献立表をチェックしながら卵と大豆の除去食を就学前まで持たせ続けたことなど。「そうだね」「そうだったよね」いつもとは逆に聞き手に回った娘が、時々相槌を打ちながら頷く。ん？そうだ、この光景、実歩の健診の後でもあつている。実歩も同じ項目で再検査を受けたのだ。再検査結果は異状なしで安心したのだが、一度経験していても、心配はまた新たなのだ。

採血を終えて我が家へ帰り着く頃にはいつもの娘に戻り、よくしゃべるようになった。しかし、結果が出るまで、娘は胸の裡にしこりを抱えたままにいるのだろう。

30代フリーター やあ、ジイさん。島根県知事の丸山達也が、新型コロナウイルスによるリスクを理由に、県内での東京五輪聖火リレーの中止を検討すると表明した。コロナ対策にくらべれば五輪は開催してもしなくてもどっちでもいいレベルの事業だという冷めた認識があるように感じられる。

年金生活者 半世紀あまり前の東京大会当時にくらべて五輪の価値が大幅に下落していることを示す表明だった。

30代 知事はリレー中止を検討する理由として、現状のままでの五輪開催に反対であることを挙げている。「反対」の理由はふたつあって、ひとつは政府と都のコロナ対策が不十分であること、もうひとつは島根県のような感染が抑えられている地域でも飲食店への打撃は大きいのに、政府の支援がないことだ。

年金 彼は前者よりも後者の不公平さのほうにより大きな憤りを感じていると推察される。島根県は全国の都道府県の中で人口が下から2番目で、知名

度も低く、政治的、経済的な影響力も大きくない。そのせいで、国や他の大規模な自治体から軽視されたり、無視されたりする経験を丸山はしてきたはずだ。それに対する憤りが、コロナ対策の支援金での不公平な扱いをきつかけに表出されたと推察される。「よく言ってくれた」と思っている県民は多いに違いない。島根県出身者のひとりとしてそう思う。コロナと五輪のおかげで、近年にない骨のある政治家の発言を聞くことができた。

30代 朝日新聞の世論調査（1月23、24日実施）では、東京五輪・パラリンピックをどうするのがいいかとの問いに「今夏に開催」は11%しかなく、「再び延期」が51%、「中止」35%と、両者で8割を超している。

年金 国民の五輪熱が高まらないのはコロナのせいだけでなく、時代に合わない二番煎じのイベントだからだ。もし1964年の1回目の東京大会の前に今と同じような新型感染症が流行し、そのとき世論調査を実施したら、

に至ったのは、「国際権力」と化した「ジェンダーフリー」が彼を許さなかったからであり、さらにこの権力にあと押しされた個人の意思が「世論」となって森批判を強めたからだ。

その背景には、資本主義の高度化が加速する富の稀少性の縮減がある。それはひとつには選択的消費が必需的消

「開催」派が過半数を占めたのではないか。それくらい当時の五輪熱は高かった。

あの時の東京五輪は、敗戦の痛手から立ち直った日本の「国威発揚」をはかるイベントであり、国民はまだ残っていた生活上の不如意を「国威」で埋め合わせようと熱烈に歓迎した。高速道路や新幹線など開催に合わせたインフラの建設は高度経済成長をあと押し、国民の生活向上への期待を高めた。それは「国威」を現実的に裏づけるものでもあった。

それから半世紀以上を経た現在、国民生活ははるかに豊かになった。選択的消費が必需的消費を上回り、生活上の不如意は消滅または大幅に縮小した。もはや「国威」によってそれを埋め合わせる必要はなくなった。五輪は国民にとって選択的消費の対象のひとつとなり、国を挙げて開催するようなイベントではなくなった。

30代 それでも政府や東京都は開催一本槍で進んでいる。

年金 彼が与党の票を稼いでくれると踏んでいるからだ。IOCがコロナ禍の中でも「開催」を呼び続けるのはそれで稼げるはずのカネを失いたくないからだ。要するに五輪はもはや「国威発揚」の場ではなく、票稼ぎとカネ稼ぎと消費の材料になっているということだ。

30代 なぜそこまで変化したんだ。

年金 オリンピックが開催国の「国威発揚」に使われた時代は、国家がこのイベントの主要な仕切り役だった。その最たる例がナチス支配下で開かれたベルリン大会だ。当時に比べると、現在の五輪は国家の仕切る力が後退し、代わって企業が前面に出てきているところに特徴がある。森喜朗が五輪組織委員会長を辞任したのも、スポンサー企業の意向が働いたことが大きな要因のひとつとなった。

国家に代わって五輪を左右するようになったのは企業だけではない。個人と国際社会をそれに加えることができる。スポンサー企業が森の責任を問う

ニュース日記 775
中村 礼治

五輪と国家

その結果、開催都市の東京は「国威」に代わって、「ジェンダーフリー」の「威力」が示される場となった。「国際権力」としての「ジェンダーフリー」は森喜朗を「解任」し、自らの意にかなった橋本聖子を後任に「任命」した。